



対馬に漂着したプラスチックで作られた製品



海を守ることは、未来を守ること

～日米韓海洋環境シンポジウム2024～



様々な立場から海洋ごみについて意見を交わした

私たちが暮らす対馬には、大量の海洋ごみが流れ着いており深刻な問題となっています。対馬市では、このほど、対馬市の現状や取り組みを例に挙げながら、日本、アメリカ、韓国の関係者が集まり、海洋ごみについて意見を出し合うシンポジウムを行いました。



国を超えて若者たちが知恵を出し合う



海洋ごみは世界共通の課題に、対馬の現状を世界が注目

海洋ごみに多く含まれるプラスチックが、地球環境に大きな影響を及ぼしていることが世界中の人々から注目を集めるようになった現在、昨年8月の日米韓首脳会談でも、3か国の大きな関心事として取り上げられました。そこで12月には、ラーム・エマニュエル駐日米国大使と尹徳敏駐日韓国大使が、日本で最も海洋ごみが流れ着いている対馬を訪れて海岸清掃を行い、対馬の現状を実際に体感することによって、3か国の連携に向けた意識を高めました。その中で、対馬の現状を知ってもらうとともに、海洋環境の保全に取り組む人たちの活動を発信するためのシンポジウムを行うことが提案されました。



ラーム・エマニュエル駐日米国大使（写真左）と尹徳敏駐日韓国大使（写真中央）が対馬を訪れ、海岸に流れ着く海洋ごみの清掃を行いました

対馬の現状と取り組みを例に、解決策を考え、世界に発信



シンポジウムには、日米韓の関係者約200人が参加し、会議の内容は3か国語で同時通訳されました

シンポジウムは、対馬市主催、駐福岡大韓民国総領事館・在福岡米国領事館共催によって、7月11日に福岡市で開催され、国際条約策定（国際的な約束）に向けた動きの報告や「対馬島の漂着ごみの現状とアクション」「海洋プラスチックと循環経済」をテーマにパネルディスカッション形式で関係者が意見を交わしました。

地球規模で取り組むために

プラスチックを循環させるメカニズムの構築や、プラスチックに関わる全ての人々が、責任をもって対応するべきだとする意見を盛り込むように求めていることなどが説明されました。この条約の交渉は、11月に釜山で第5回目の政府間交渉委員会が行われ、今年中に作業を終える予定です。

2022年11月から、プラスチックによる地球環境への汚染に関する国際条約を策定するための政府間交渉が行われていることから、シンポジウムの冒頭、環境省から、日本が、社会全体でプラスチック



説明を行う環境省 地球環境局 大井 通博 総務課長

大学生も国を越えて考える

シンポジウムの前日には、イベントとして大学生が主体となり、沿岸や海洋保全を考える取り組みとして、福岡市内にあるアメリカ領事館の施設でワークショップが行われました。

学生は、政府や企業におけるプラスチック汚染対策の取り組みや、対馬での海洋ごみの現状などについて説明を受けたのち、プラスチック汚染に対し、どのような行動を起こすべきかグループで議論し、発表を行いました。



発表では、プラスチックごみを積極的に回収してもらうために、企業などから資金を調達し、回収した人に医療や食事などのサービスを提供する案や、プラスチック製の衣類を洗濯した時に発生する小さなプラスチック片を回収するためのフィルターを3Dプリンターを使って安価に製作し、世界中の洗濯機に取り付ける案など、様々なアイデアが出されました。



ディスカッションや発表は英語で行われ、活発な意見が交わされました



生まれた国や地域、学ぶジャンルも違う学生たちが、海洋プラスチックを減らすために知恵を出し合いました

2つのテーマでディスカッション session1 対馬島の漂着ごみの現状とアクション

韓国海洋水産開発院 専任研究員

ナム ジョンホ氏

海洋プラスチックは、陸上で発生したプラスチックごみが海洋に流出し、世界に広がっているため、海を汚すというだけでなく、どこが管理や対策をとるのかなど、非常に複雑化している問題です。

私は、2003年に韓国でワークショップを行い、翌年には対馬に行き、海岸清掃やワークショップを行いました。小さな取り組みからスタートさせ、現在、日韓両国は、海洋ごみをテーマに協議を行うようになりました。海洋ごみは私たちが解決しなくては

いけない問題ではありますが、今回、アメリカが参加するなど、海洋ごみが太平洋地域をつなげてくれる「外交官」のような存在であるとも言えるのではないのでしょうか。今回のシンポジウムは、小さな一歩かもしれませんが、しかしこれから先の取り組みとして、大きな影響を及ぼすと思います。

パタゴニア日本支社 支社長 マーティ・ボンフレイ氏

パタゴニアは、1957年に創業したアウトドアブランドです。高品質な製品を作ることはもちろんですが、環境に配慮した取り組みを行っています。2018年には、私たちの故郷である地球を救うことを事業の目的として、自然から価値を引き出し富に変えるとともに、その富を自然環境に使うことにしました。



対馬で回収された海洋ごみ100%で作られたフリスビー

私たちは、製造する服などが環境に悪影響を与えることを認識しており、その問題を2030年までに解決することを目標にしています。現在、廃棄する漁網などをリサイクルした製品や、できるだけ長く使える製品を作るほか、使わなくなった製品を買い取り、リサイクルして販売する取り組みなども行っています。



パタゴニア日本支社長
マーティ・ボンフレイ



シンポジウム参加者の声

九州大学 共創学部4年 レイク 沙羅さん

企業や自治体、市民団体など、いろいろな立場で活動に取り組んでいる人たちの話を聞くことができました。この問題は、複合的な取り組みがとても大切だと思うので、この会をきっかけに、活動や実践が続いてほしいと思います。私も、対馬に行って、ごみの様子や取り組みについてもっと知りたいと思います。



九州大学 工学部3年 藤田 航旗さん

プラスチックが当たり前になった生活の中にある若者たちが、当事者意識を持つことはとても大事だと思いますし、国際的な枠組みを作る上でも、私たちの声を伝えることは大事だと思います。これで終わりではなく、これを機にもっといろいろな人々と意見を交わしていく必要があると思いました。

パネルディスカッションでは、対馬での海洋ごみの現状と取り組み、そして、海洋プラスチックを経済と結びつけて減らしていく取り組みについて、それぞれの立場から発表が行われました。

session2

海洋プラスチックと循環経済

サラヤ株式会社 代表取締役社長

さらや
更家 悠介氏

今回は企業の代表、NPO法人の代表、そして関西の経済団体の代表として参加しました。2019年のG20で大阪ブルーオーシャンビジョンが出された際、ビジネス界からも何かアクションを起こさなくてはならないということで、NPOを立ち上げて活動を始めました。対馬には、実際に多くの海洋プラスチックが押し寄せていますし、世界のプラスチック使用量は、増加している一方です。この使用量を削減し、使い終わったプラスチックをきちんと回収していかなくてはならないのですが、その仕組みがまだできていません。そこを何とかしようと、対馬市などと連携し立ち上げたのが「ブルーオーシャン対馬」という会社です。私たちとしては、ビジネスという方法で社会に役に立つというスタンスでいて、この会社では、流れ着く海洋ごみと島で発生するごみを一緒に再資源化することを目指しています。たとえば、流木を炭にしたり、発泡スチロールを溶かして再利用するなどの計画を持っています。来年の大阪・関西万博に出展するパビリオンで、そのことを世界に発信していきたいと思っています。



ポハン産業科学研究院 主席研究員 **ジョン ソンウ氏**

私たちは鉄鋼を作る企業であり、その中で出る副産物を再利用するための取り組みを行っています。韓国でも海藻が消える「磯焼け」が進んでおり、その中で注目したのが、海中の鉄分の消失です。鉄を作る際に「鉄鋼スラグ」という物質が出るのですが、そのスラグを海の再生に活用できないかということで研究を進めました。そこで生まれたのが、海藻の再生を行う漁礁です。2012年に韓国で行われた万博を機に、鉄鋼スラグを含んだコンクリート製の構造物を海に設置し、その後どのような変化をするのか9年に渡ってモニタリングを行いました。その結果、海藻類の定着が90%以上維持していることがわかっています。企業が排出するものを活用して、環境保全に取り組むという姿勢は、

他の分野でもできる可能性を秘めています。大切なのは、一人一人が現状を認識し、循環社会の一員という意識を強く持つことだと思います。

共同メッセージを発信

シンポジウムの最後には、今後もこのような場をすることによって、海洋環境の維持や持続可能な社会づくりの推進につながることを願う共同メッセージが採択されました。

共同メッセージでは「日米韓それぞれが持つ情報を共有することの重要性と、その情報を活用しながら循環社会を構築することを推進する」「深刻化するプラスチック汚染に対し、その問題を認識し、積極的に解決に向けた取り組みを行う」「海洋環境を守るため、このような取り組みに若い世代に積極的に参加してもらい、次の世代へこの取り組みを継承していく」ことが盛り込まれ、参加者が拍手で承認しました。

